



初めまして。

愛されすぎたギャル子へ

彼女の12年は波瀾万丈であったに違いない。

なぜなら、彼女は三度目の正直で神に愛されたのだから・・・。

初めて彼女を見たのは、私がまだ中学生の時だった。

姉が以前勤めていた動物病院で出会ったのだ。動物病院は線路を渡った小高い山の途中にあった。病院からは海が見え、潮の香りがプ〜ンと漂ってくるとても良い環境だった。院長先生はとても優しく町の評判は上々だった。

診察も丁寧だし、説明も分かりやすくていい、と噂が噂を呼び人や動物たちが集まっていたいつも賑やかだった。

その先生が悲しそうに、しかしきっぱりと言った。

「あんまり生きないだろうから実験で使うんだ」

そう、彼女はとても小さかったし、なにより片目がつぶれていたのだ。

不思議と気持ち悪くはなかった。とにかくかわいかった。緑色の診察台の上でプルプル震えてはいたが、片方の目が強く光を放ち、一生懸命生きようとしていた姿が心に残った。

「どうして片目がないの？」

聞いていいものなのかどうか迷いながら私は恐る恐る聞いた。先生は慎重に言葉を選びながら、しかし冷静に言った。

「産まれた時に他の子にひっかかれたんだ。飼い主さんがそのままにしていたんだよ。」

続ける。「そのせいで産まれた時は標準だった体重も、増えなくなっちゃってこんなに小さいんだよ。」

未熟児と思いこんでいた私は驚いた。成長不良なのだった。とにかく小さかった。姉のナース服のポケットで彼女は遊べていたし、中学生だった私の手のひらで眠れていたのだ。

彼女の犬種はパグだった。今まで何匹も犬や猫を飼っていたがパグという種類は初めてだった。まだ顔はそんなにくしゃくしゃではなかったが、近くでみないと黒くて鼻や口がよく分からなかった。片方の目がキラキラしていてとても印象的だった。お腹が破裂しそうなほど大きかったのか、それとも足が短かったのか、うつぶせに彼女を置いても足が地に着かずに前に進むことが出来なかった。足がパタパタ前後に動いて空をむなしく蹴った。

「ねえ、どうせ生きないならちょうだい。」

・・・そして彼女は我が家にやってきた・・・。

彼女の大先輩達

ここで私は、忘れないうちにもう一匹の家族を紹介しておこうと思う。

うちにはもう一匹犬がいる。ゴウ君と言う。彼は雑種で中型犬なので外で飼っていた。とは言ってもコンクリートでできた大きな納屋の一階が彼の家である。彼はとにかく利口で、まるで私たちの言葉を理解しているようだった。ゴウも私が拾ってきたのだ。

ギャル子にしたら彼は先輩である。それを分かっていたのか、ゴウのほうはというとまるで彼女を相手にしなかった。年はそんなに変わらないはずだが。。

ゴウの前にうちにはチャコと言う犬がいた。私たち家族は【やぎぶし】で有名な群馬に住んでいた事があった。母方の祖母が病気になって入院したのをきっかけに島根（現在に至る）に引っ越してきたのだ。その当時、うちはもの凄く貧乏だった。犬なんて飼っている余裕もないほどに。幼心に覚えているのは、父は灰皿から短くなった吸い殻に爪楊枝を刺して再び火を着けて吸っていたものだった。ところが家族は動物が大好きだった。心に余裕が出来るし、癒しの効果が得られるからではないだろうか。

貧乏だった私たちは群馬から島根へとポンコツの軽乗用車で国道を走った。何日くらいかかったのかはまるで覚えてないが小学生だった私は大冒険の中にいるようでワクワクした。その時、助手席の足下にはチャコがいた。一言も文句を言わずに丸くなって良い子にしていた。島根に越えてきてすぐだったろうか。チャコはフィラリアでお腹に虫がたまりあっけなく逝ってしまった。姉は、私が今まで一度も見たことが無いくらい泣いた。チャコがずっとしていた鎖の首輪を泣きながら洗って自分の机の引き出しに大事にしまい込んでいたが、今では何処に行ってしまったのだろうか。

私がゴウ君を拾ってきた時、母は反対したが、それは最初だけで意外とあっさり許してくれた。何故かはすぐ分かった。ゴウ君はチャコに似ていた。白に茶色のまだらの模様も、大きさも。そしてなにより、凛々としてすらっとしてとても美しかったのだ。誰が雑種だと思うのであろうか？

今はもう、足の付け根の所には大きなシミができ、そこだけがダルメシアンのようにになっているし、背中のはあばら骨が浮き上がってみすぼらしいくらい痩せこけてしまっているが彼の端正な顔立ちと、スマートな身のこなしは現役そのものだ。

寒がりで暑がりだね

「もう、長く生きられない」ギャル子はみるみる大きくなって、そしてみるみる太っていった。いつの頃からか、彼女は目がない方にぺろっと舌を出すのが癖になっていた。そしてそれはずっと出続ける事になった。いつ見ても、どこにいても、何をしてもぺろ〜と出ている。

ある寒い冬の日、外は雪が降り積もって庭の松の木も、つんつるてんになっているサルスベリの木も雪化粧をまっていた。私は何気なくギャル子を見た。

ふと、いつものようにホットカーペットの上でくつろいでいたギャル子の舌を触ってみたいとなった。そ〜と手を伸ばして、背中を丸めて「くふん〜」と幸せそうなギャル子の口元に近づいてみた。触れた瞬間ギャル子は今までの幸せが夢だったかのようにピクッと上半身を起こして迷惑そうに私を見た。

彼女の舌は乾燥キクラゲのようにカリカリになっていたので私は面白くなって何度も何度も触った。彼女はその度にうっとおしように舌を引っ込めた。頭をあっちに向けたり、こっちに向けたりしていたが最後にはやれやれとその場から退散してはこたつに潜っていった。

そう、そうだった。ギャル子は寒がりの暑がりであった。

ギャル子のトイレは家の中にあり、そこは良く日の当たる縁側の一角を占領していた。しかし彼女は日中は必ず庭に出て用を足した。冬の寒い日は何度も何度もガラス戸のところでためらった。二度三度とためらった後に意を決して庭に出たものだった。松の木の下で用を足し終わると、同時に、ピューッと戻ってきては震えながらガラス戸を前足でカリカリ掻いた。ギャル子の足を洗うのはもっぱら父の役目であった。うちの家は裏口から入ったところが物置のようになっていて、そこに水道がある。ギャル子の足を洗ったり、魚の掃除をする時に使うのだ。裏で足を洗ってもらおうと台所の床をカチャカチャ言わせ、一直線にこたつに潜るのであった。

そのスピードはカールルイスも驚くであろうほどで、私たちはそんなギャル子をよく笑った。夏は夕方涼しくなるまで庭に出ては日陰でベロを出していた。夕食近くなるといつものように裏にやってきては足を洗ってもらい家の中に入ってきた。歩くのもだるそうで冬の元気は何処に行ったものだろうと思わせる程であった。

二人でお留守番

ギャル子がうちにやってきてすぐのことか、今はもう記憶も定かではないがまだまだ幼い頃の話である。病院に連れて行ったりいろいろ用途があるだろうから、とギャル子の籠を買ってきた。いや、正しくは記憶にないのだがとにかくうちに持ち運びの出来る籠があった。

私は、一度ギャル子と二人で留守番を頼まれた事があった。その時、私はギャル子を籠の中にしまい込んだ。ギャル子は私を見ていた。片方の目でジーンと見ていた。どうして??出して??と言わんばかりにジーンと。

何故か?私は自信が無かったのだ。正直言うと、恥ずかしながら怖かったのだ。留守番を頼まれてすぐ色々な

【あるかもしれない】

予想が頭の中を駆けめぐったのだ。その時期、彼女は歯が生え始めていたらしく至る所をガジガジやっていた。こたつテーブルの四つ角は木が削られて悲惨なことになっていたし、ギャル子のお気に入りであったパンダのぬいぐるみは腕が皮一枚で繋がっていたという現状であった。

【おしっこしちゃうかも】

【噛まれちゃうかも】

とありもしない想像で自信をなくした結果、ギャル子は籠の中、という定義が私の頭を一分の隙もなく埋め尽くされたのだ。

親バカ？バカ親？

うちの家族はとにかくギャル子を甘やかした。誰が見ても親馬鹿で、時には誰の目から見ても馬鹿な親であった。ギャル子は私たちの中では子供と同じ感覚で、それは家具にも表れていた。食卓には子供用のハイチェアが用意され、夕食時になると彼女はその上に座らされ同じように食卓についた。その当時は4人家族であった為、食卓もそれなりの4人掛けであったが、ギャル子は5人目のちょっと狭い場所に椅子を置いてもらっていた。

それに、彼女用に籐の座椅子まで用意してもらった。そこはしばらくはギャル子の寝床になったが、彼女の成長は誰にも止めることが出来ず、その一人掛けの小さな座椅子はほんの何ヶ月しか出番がなかった。他人が見れば、赤ちゃんでも産まれたのかしら？と思わせてしまっても仕方がないような家具や食器の山は、記憶にもとどまらないほどの短い期間で幕を閉じた。子供の成長もそうであるが、子犬の成長もそれに匹敵するぐらいの早さである。いや、当たり前であるが動物のそれは本当に驚かされるほどである。そう、ギャル子は私たちや病院の先生の心配をよそにたくましく丈夫に育ててくれたのである。

ぎゃる子の攻撃

ギャル子はお風呂があまり好きではなかったらしい。ある日の事だった。いつも一緒に姉が入っていたが、風呂場から姉の悲鳴にも似た

「痛あああああ～っ！！」

という叫び声が聞こえた。間もなくギャル子はお風呂から飛び出て来てまだびしょびしょの身体をこたつの中にもぐらせた。

「どうしたん？」

風呂場に行ってみると姉が血を流して立っていた。

・・・乳首・・・

そう、よりもよって姉の乳首をギャル子は噛んだのだった。それは勿論のことであるが、かなり痛そうだった。結構な量の血が流れ出ていた。姉は母に治療をしてもらい、そしてそれから二度と一緒にには入らなかった。

こんなこともあった。

なにが原因かはよく覚えていないが、多分私がちょっかいを出したことから始まったのだと思う。そう、あれは夕方だったと思う。なぜなら、確かそこには夕飯の支度をしていた母の姿があったからだ。

私はギャル子と彼女のお気に入りのパンダのぬいぐるみで遊んでいた。気が付くと私たちは母の居る台所まで移動していた。きっと遊びがヒートアップして喧嘩になったのだろうと思う。彼女は私の左手の親指を思い切り噛んだ。傷跡も残ってないし、きっとたいしたことでは無かったのかも知れないがその時の私は指が無くなったと思った。なぜなら、びっくりするくらい痛かったし、かなりの血が出たと思ったのだ。指はしびれて動かなかったし、なによりギャル子の目の色が変わっていたのだ。攻撃的な目だった。鋭い光を放ち苛立っている彼女の気持ちが分かった。私は怖くなって泣いた。それを一部始終見ていた母は笑った。

「犬と本気で喧嘩して負けるなんて・・・」

それはそうかも。だってギャル子はまだまだ赤ちゃんだったし、なにより小さかったもの。

紳士な態度

前にも記述しているようにギャル子は夏はいつも庭で日光浴を楽しんだ。

事件が起きたのは、私が仕事を始めて少ししてからだった。ちなみに私は諸事情により定時制高校へ一年遅れで通っていたため、この頃は16~7歳くらいであったと思う。定時制では学校自体は夜間である為、昼間は仕事に就くことが原則だった。

いつものように仕事の帰りに父に迎えに来てもらった。車中で、父は今日の出来事を話してくれた。

「今日は、ゴウ君は偉かったんよ。ギャル子がゴウの近くに行ったんだ。そしたらゴウの餌があって、ギャル子がそれを食べようとしたんよ。そしたらゴウが怒って。。。」

車が赤信号で止まった。

「それから??どうなったん??」

私は先をせかした。父は続けた。

「ゴウ君、ギャーちゃんを押さえつけてワンって吠えたんだけど、それだけで噛まんかったんよ。」

ゴウは分かっていたのか?自分を押さえる事を。そしてギャル子が女であり、弱き者であることが・・・。

犬なのにやるな!

と、私は帰ってすぐゴウの所へ行って頭をなでてやった。ゴウのそういう紳士な所は是非人間である現代の男共にも見習ってほしいものだ。

オヤジの愛情

そんなゴウは本当に偉いのだ。ご飯を持って行くとおあずけなんてとてもじゃない出来ないが、「戴きます」を必ず言う。「いただきますは？」と言うとワンと一回吠えてから食べる。お腹が空いて我慢できないときは

「ひゃん」

と、なんとも調子っぱずれな声を出してご飯を急いた。

これはギャーちゃんはだめだった。何度教えても言わない。最後には怒ってぐるぐる〜と威嚇した。彼女はおやつにしても、ご飯にしても何でも食べた。チーズが大好きで一時食べさせていたら、毛がキラキラ光って本当に綺麗だった。金色だった。チョコレートも食べた。

そんな、なんでも食べる彼女の一番の好物は柿だった。なりふりかまわず食らいついたものだった。父はこたつでよく柿を剥いた。ギャル子が嬉しそうに食べるので、何個も何個も剥いていた。そんな父もまた嬉しそうだった。

いつの事だったか、もう記憶も曖昧であるがまだまだギャル子が赤ちゃんの時のことだ。

父は毎晩ビールで晩酌をする。これは昔からの決まり事のように一日も欠かしたことはないのだ。その日も変わらずこたつでビールを飲んでいた父が、何を思い立ったのか急にギャル子にビールを飲ませたのだ。飲ませた、と言ってもほんの少量舐めさせただけだったと思うが、これがギャル子にとっては大変な事になった。急に興奮しだしたと思ったらまともに歩けなくなって（いわゆる『千鳥足』だ）あちこちにおしっこをして歩いた。その場に誰が居たのかはあまり覚えていないが、そこにいた全員が腹を抱えて笑った。犬が酔っぱらうなんて前代未聞だし、本当にそんな事があるなんて全くもって考えられなかった。

父はやはり嬉しそうにギャル子を抱きしめて笑っていた。

二度目の奇跡

彼女はいつの間にか女になっていた。

あっという間に年を重ね生理が来た。私たちは慌てて子供を産ませるかどうかを相談した。

沢山の時間話し合ったが、結局父が

「こんなに小さい体で（もうかなりデブちんだっただのに）可哀想だ」

と言い張ったので子供は諦める事にした。

生理帯と言ったか、犬用の生理ショーツがあった。初めは部屋の中が汚れてしまうので（これは、仕方の無いことで）履かせていたが、気になって仕方がないのかギャル子は間もなく便秘になった。パンツは肛門の所は穴が空いていて用を足せる構造になっていた。思ったよりもデリケートだったようだった。パンツ姿は腹を抱えるくらい可愛く、それ以上に笑えた。私はあんまり可愛いのでパンツを脱がせる事は反対だったが、彼女の健康を考えるとそれ以上履かせておくことは叶わなかった。

もちろん家の中は汚れたがギャル子が楽ならと、もともと掃除が趣味の母はこれまで以上に趣味に力を入れた。ギャル子の子供をなかなか諦められなかった姉と私は、来年こそという思いで手術はしなかった。

それから何年も子供を産まずに、彼女は生理の度に血の塊が出たり嘔吐したりするようになった。少しずつ、少しずつ子宮は悪化していた。そう、子供を産ませなかったせいで彼女の子宮は血がたまるようになり、肥大していったのだ。

そんなある日の事、前日から血の塊がいつもよりも沢山出ていたし、一晩中嘔吐を繰り返していたので次の日急いでいつもの病院に連れて行くと、その日のうちに子宮を摘出する手術をすることになった。

この日、ギャル子は女としての人生を終わらせたのであった。可哀想な事をした。人間のエゴだった。先生曰く

「もう一日遅れてたらギャーちゃんは死んでいたよ。麻酔が出来なくなっていたらろうから。今日でよかったよ。」

彼女は運が強い。この日を含め、産まれてから二度命が助かっていた。そう、生きられないと言われたあの日から・・・。

シュシュの使い道

今回の【ぎゃるこ、女の人生幕を閉じる】事件で私は勿論のこと、母も姉も父を思いっきり責めた。責めて責めてもうこれ以上相手を凹ますことなど出来ないだろうというくらい責めた。やはり、同じ女である私達はどうしてもその辛さから、誰かを責めずにいられなかったのだ。

父は一人ぼっちにされいつものようにあぐらの中にギャル子を入れながら【よしよし】と頭を撫でていた。やはり女である以上子供を産ませてやりたかった。

ギャル子という名前は姉や動物病院の看護婦さん達が付けた。片目だったので最初は『目玉親父』そして当時流行っていた『親父ギャル』になって、最後に女の子だから子を付けて『ギャル子』になったらしい。ちょっと変わった名前ではあったが、みんなも気に入っていた。とにかく呼びやすいのだ。怒るときも、可愛がるるときも。本人も気に入っていたのか

「ぎゃ～ちゃん」

って呼ぶと、耳をピクッと動かし、そしてこちらを見ていた。後ろから呼びかけると首だけ回して【な～に～】とでも言いたそうでどうにもかわいらしかったものだ。そんなギャル子は父親が大好きだった。いつも父の膝の中でくつろいだ。父が仕事から帰ると玄関まで走って迎えに行ったりしていた。いつも首を少しだけかしげてきょとんとした顔をしてこちらを見ていた。

首輪をしていなかったので首の動きはかなりしなやかだった。小さい頃は姉のシュシュを頭からすっぽり通して首輪代わりにしていた。赤い布で、小さい花柄のかわいらしいゴムだった。姉や私の髪の毛をなんども飾ってくれたゴムはギャル子の首に収まった。ギャル子は一度も嫌がらず、なんだか自慢げにさえ見えた。しかし彼女は成長がとてつもなく早かった。

彼女自慢のシュシュで出来た首輪はあっという間にきつくなっていた。いつしかシュシュを（首輪を）すると窮屈になるのが分かったようで、頭をブンブン振り回して嫌がるようになったので行き場の無くなったシュシュは当時、私の愛車であったセルボクラシックのシフトレバーを飾ってくれた。余談ではあるが5年ローンで買った愛車はかなりのお気に入りです。私は10年は乗ろうと決め込んでいた。

その頃ガソリンスタンドで働いていた私は、仕事柄オイル交換もタイヤ交換も自分で出来たので毎週土曜日になる必

ず洗車とワックスはかかさなかった。季節の変わり目になるとタイヤ交換もしたし、オイルだって3ヶ月、又は3000キロを目安に交換していた。その愛車は1年半で私のわき見運転により天国へ旅立ったのだ。CDチェンジャーも付けたばかりの私の車は4重衝突の激しい事故の中で私にかすり傷だけを置きみやげにして守ってくれたのだ。私はそれから一度も車を運転していない。心配しまくった家族の猛反対に遭ったのだった。

ギャルコ、危機か！？

時を同じくして、ギャル子にとって大事件が起きた。大好きな父の膝の中をとられたのである。そう、姉が子供を産んだのだ。初孫だったので父親を含めみんな必要以上に可愛がっていたのではないだろうか。ギャル子が膝に入ろうと思うときにはすでに赤ちゃんが居座っていた。父が仕事から帰ると、いつものようにギャル子は玄関まで走って迎えに行く。誰よりも早く父の膝を確保する為に父について歩く。まずは台所だ。母に「只今」を言いに行く。次に洗面所に手を洗いにいき、最後に居間である。ギャル子はその全てについて歩く。しかし、可哀相なことに願いは届かないものだ。それだけ苦勞をしても、やはり孫が一番に父の膝に入るのは間違いがなかった。

そんな赤ちゃんももう、今では小学3年生になった。ギャル子にとっては赤ちゃんが大きくなるのは好都合だったに違いない。大好きな父の膝の中はまたしてもギャル子のものになった。これでいいのだ、と言わんばかりの顔をして当たり前のように父の膝に滑り込む。しかしそれも約3年の間だけであった。

間もなく姉に二人目の赤ちゃんが産まれたのだ。これにはギャル子もまいったらしい。我慢してやっと取り返した父の膝の中をまたしてもとられてしまったのだ。しかし、父はギャル子に気兼ねしていた。抱っこも「ギャーちゃんが怒るから」と言ってはギャル子を最優先に可愛がった。父のギャル子への溺愛ぶりは目にあまった。

ギャル子の宝物

父がギャル子を可愛がるのも無理はなかった。本当に可愛かったのだ。

ギャル子にはお気に入りがあった。それはパンダのぬいぐるみだった。うちにやってきてからずっと持っていたギャル子の宝物であった。

もうすでにボロボロになっており原型をとどめていなかったが新しいぬいぐるみは決して宝物にはなり得なかった。

「ギャーちゃん、おもちゃもついで。」

と言うと仏間に置いてある買い物かごの中から（どこかのスーパーから母が持って帰ったのをおもちゃ入れにしている。）必ず持ってきた。それを引っ張ってやるとすごく喜んで何度も何度も引っ張りあいこをした。唾液がありとあらゆる箇所に付いていて、所々カリカリになっていたし、それがものすごく臭くて、おまけに何処が黒い所か分からないほど真っ黒になっていた。パンダには可哀想な事をしたけど、綿が出ても手がとれてもギャル子はパンダを愛した。やがて月日が流れ、パンダはおもちゃ入れの中から出ることは無くなっていった。

飽きたのだろうか？

いいえ、それは違っていた。そう、いつの間にか彼女はパンダで遊ぶ元気がなくなっていたのだ。

別れと再会

2001年、私は実家を後にして大阪にでてきた。大阪に恋人が出来たのだ。

ギャル子にも別れを告げた。玄関先までくると彼女はいつものように小首をかしげて私をみつめた。まるで仕事に送り出すように「行ってらっしゃい。」と視線を投げてくれた。そしてゴウにもさよならを言った。二度と会えなくなるわけではないのだが私はすごく寂しかった。なぜならギャル子もゴウも、もうかなり年をとっていたからだった。

かわいい姪っ子達に後ろ髪を引かれながら大阪にやってきてもう2年になる。実家に電話をするとならば後ろから「ワンワン」とギャル子の声が聞こえたり姪が「ぎゃ〜ちゃん」と呼びかけたり・・・それが普通だった。今ではそれも、もう過去の話になってしまったけれど。

それから一年経ったある吉日に私は結婚した。

結婚式は実家の近くの有名な大社で挙げた。結婚前夜、私は実家に戻った。玄関を開けるとギャル子の匂いがする。もう、迎えに出てくるほどの元気はなくなっていたが、部屋まで入ると【べちゃ〜】と寝そべっていたギャル子の首が、これまた【のそ〜っ】と上がる。「おかえり〜。よ〜戻ったねえ。」と言わんばかりの顔を向けるとまた頭を元の位置に戻す。元の位置と言っても馬鹿には出来ない。一寸違わず【元の位置】なのである。これはもう、ほとんど神業と言っても過言ないであろうと思わせるほど正確であった。

家にいると仕方のないことだがギャル子の毛が洋服に付く。家を出るときにはコロコロで洋服の毛を取るのが当然の動作だ。背中やおしりの方はどうしても手が届かないものなのでこればかりは皆で共同作業になる。当たり前だが、結婚式の当日も少し良い洋服に付いた毛をコロコロで取った。

それから五ヶ月後私は男児を出産した。授かり結婚だったからだ。自分の子がこんなにかわいいと思わなかった。ギャル子に会わせなかった。会ってニッコリ笑って欲しかった。まだ3ヶ月にならない我が子を無理矢理実家に連れて帰った。なぜだか私はあせっていた。早く会わせなければ、と正月を口実にバスで延々六時間の道のりを主人と一緒に戻った。私は実家で一ヶ月ゆっくりした。

ギャル子は赤ちゃんに慣れていた。「またかよ」とでも言いたげに、寝かせている子供の上を踏んづけて歩いた。子供はびっくりして泣いたが、ギャル子はそんなことお構いなしのようだった。赤ちゃんの扱いは私よりも慣れていたからか、彼女は先輩面をして見せていた。それもそのはずでギャル子はもう、おばあちゃんだった。椅子の上に飛び乗る事も出来ないし、父が仕事から帰っても分からないようであった。大きな声で呼ばないと振り向く事もなかった。耳が遠くなって、目も目やにがいっぱいだった。お腹は皮がたるんで大変に気持ち良かった。

そんなにおばあちゃんになっても、どれだけ赤ちゃんに慣れていようとも、やっぱり父の膝は譲ってはくれなかった。父はギャル子が昼寝をしている時にだけ息子を抱いてくれた。初めての男

の子で喜んでくれてはいたが、父の中でのギャル子の地位は不動のものであった。

懐かしいね、ギャル子

ある日、歩くたびにカチャカチャと爪があたる音がするので、姉と一緒にお世話になった動物病院に爪を切りに連れて行った。

どぶにはまったり、よろけたり、爪でコンクリートがすべったりして歩くのも大変だった。私はそんなギャル子を見て笑った。姉もケタケタと声を出して笑った。もうギャル子には病院までの道のりはとうてい辛いものだったのだろうに、彼女は息を切らしながら小高い山の途中まで懸命に歩いた。

動物病院はとても懐かしかったがギャル子は覚えていたのだろう。中に入るのを嫌がった。無理矢理中に入り、受付を済ませると「塩田ギャル子ちゃん」と名前が呼ばれた。もう、あの頃の看護婦さんは誰一人としていない。産まれたてのギャル子を知る人はココには先生と姉だけだった。私が懐かしさに酔いしれていると先生がやってきた。私たちとギャル子に丁寧に挨拶してくれた後、ギャル子のカルテを持ってきた。

看護婦さんに爪を切られているギャル子を押さえつけながら、先生の説明が始まった。なぜかイヤな予感がして私は手に力を入れた。

「パグは冬に弱いから、気を付けてあげてね。冬にガクッとくるから。」

そう、彼女はもう12年生きていた。

ギャル子、逝く

そして2003年3月15日の早朝5時34分の事だった。

その日は子供のお食い初めの御祝いで主人の実家に来ていた。ちょうど子供が泣いたので起きておっぱいをやったところだった。

「ギャーちゃん、死んじゃった。」

普段メールを打つのに苦労している父からのたった一言の受信であった。私は一瞬時が止まった。まさか信じられなかったのだ。急いで電話で確かめないと、と思いすぐに父に発信した。

「夕べ、吐いたんだけどいつもの事だからあんまり気にしてなかったんよ。今朝ママが起きたら、こたつに潜ってたギャル子の息が荒かったからおかしいと思って抱っこしてやったんだって。そしたらママの腕の中でシャ～ッておしっこしてそのまま死んだんだって……。」

n想像を絶する空白が私を包んだ。言葉が見つからなかった。「いいようにしてやって……」一言、本当に一言しか言葉がでなかった。それが精一杯だったが、私はそれを現実として受け止めていたのだろうか？今でも思うのだが、そこにいなければ分からない事もあるのではないだろうか？ただ、とてつもない頭痛と吐き気が私を襲った。とにかく悲しかったし、どうしようも出来なくて主人を起こした。

一人で受け止めることが出来なかったのだ。しゃくり上げて泣く私を見て主人は飛び起きた。「あき、どうしたんだ？」と聞かれて、答えようと口を開いた。

「ギャーちゃんが死んだって……」

思いがけずに声がうわずった。主人は目を大きく丸くして驚いていたが、（私はこの時、人間ってここまで目が丸くなるものなんだなんて下らないことを考えていたのだ。）一時して私を抱き寄せて頭をヨシヨシと撫でた。私は何かがプチッと切れたように、思い切り泣いた。どんなに泣いても戻って来ないし、たとえギャル子がさよならを告げた瞬間に私がいても彼女はさよならを言ったと思うし、かと言って何処にも行かないように抱きしめて離さなくとも離れて逝ってしまったと思うが何故か納得が行かなかった。自然の法則が残酷すぎて私の正気をどこかに追いやってしまっていた。

私は少し横になって落ち着いてから姉にメールで写真を頼んだ。姉は二枚送ってきてくれた。あまり苦しんではないようだった。安らかだったから安心した。私はちょっと笑った。だって、舌が出ていたんだもの。

9時になって子供と階下に降りた。御祝いの日だったのでギャル子の死を割り切ろうとしたが、一人でいると悲しくなるので私はあえて義母や主人と一緒に過ごそうと努めた。本当は泣きたかった。一日中、何もしたくなかったし何処へも行きたくなかった。誰とも会いたくなかった。でも、それは許されなかったのだ。みんなが楽しみにしていた子供の御祝いだったし、私達の結婚1周年の御祝いも兼ねていたからだ。

きっと、一生忘れない日になるだろう。

これまで色々な動物を飼っていた。どの子もとっても可愛かったし、死んだときは本当に悲しかった。でも、正直命日を覚えてる子はいない。ギャル子はとても我が儘だったから、きっと私が忘れないようにその日を選んだのかも知れない。

私は携帯電話の待ち受け画面を変えた。いつもは子供の写真を待ち受けにしているが、その日から一週間はギャル子の遺影を飾った。そして、初七日が終わるまでなるべく暗い服を選んで着た。そばにいてやりたかったがそれはかなわなかった。

日に何度か父から電話が入るが、父は電話の度に泣いた。母が泣く、と言っては父も泣いた。私にはどうしようもなかった。きちんと火葬してもらってお経もあげてもらったようだった。お骨を納めるのは寂しいと言って家に連れて帰った、と父が言っていた。

そう、ギャル子は今でも生前と変わらず居間にいるのだ。仏壇に置いたら？と私は言ったのだが、母が

「ギャル子は居間の方が落ち着くの。みんなの事がよく見えるように。」

と言うので彼女はテレビの上に居るのだ。

どこかにいるみたい

この夏、子供も9ヶ月になってだいぶんしっかりしてきたので正月以来、久しぶりでもないが実家に戻った。ギャル子のいない実家に・・・。

いつものように家の中に入るとギャル子の匂いがかすかに鼻をついた。ギャル子のトイレのあった場所にはトイレの代わりにクッションが置いてあり、その上には大小沢山のパグのぬいぐるみが置いてあった。テレビの上にはギャル子の写真とお骨が置いてあったし、母が日の大半を過ごす台所にもギャル子の写真が置いてあった。二階に上がるとそこは寝室になっているのだが、やはり枕元にはギャル子が居た。

私はギャル子を探すように家の中を歩き回った。いつかの髪飾りを首輪にして、小首をかしげるギャル子や、ゴウと楽しそうに戯れているギャル子。父の膝の中で幸せそうに居眠りをしているものもあった。探せば探すほどなんだか悲しくなり、動いているギャル子に逢いたくなかったので私は家の中を徘徊するのを止めた。

数日後、天気の良い日に姉がホットカーペットを庭で天日干ししていた。あまりの天気の良さに息子を連れて庭に出てみるといつか嗅いだような匂いが鼻をかすめた。

それはまぎれもなくギャル子の匂いで、私はあるはずのない事を思い切り期待してしまったのだ。なぜなら、匂いと共に私の元にやってきたのはギャル子の毛だったからだ。

玄関先が日陰になる場所があるのだが、ギャル子がそこにいるような錯覚に落ちた。それは姉も同じだったらしく、私を見つけると

「ぎゃーちゃんの匂いがするね。カーペットからだよ。まだ毛がいっぱい付いてるよ。」

と、どこか寂しげに、反面嬉しそうな目をして私に言った。私は息子と一緒にカーペットの側へ行ってみた。すごく新鮮にギャル子の匂いがして、とても臭くて、笑った。

ギャル子、教えてね

父がこんな話をどこからか仕入れてきた。

「犬っていうのは、特に座敷犬は死ぬ時に飼い主が起きてくるまで待ってるんだって。普段なら【10】息をする所を【3】位に息をするのを押さえてなるべく長く生きようと頑張るんだって。それで、飼い主の顔を見ると安心して逝けるんだって。」

どこでこんな話を聞いてきたのか？誰がこんな話を教えてくれたのか？母は聞いた後でじわっときたと言っていたが、私も母同様に目頭がカーッと熱くなった。ギャル子も母が起きてくるのを今か今かと待ちわびていたのだろうか？息を殺しながら寿命を延ばして、二階への物音に、それこそ一生懸命に耳を傾けていたのだろうか？

そして、待って、待って、待って……。どんな気持ちだったのだろうか？早く逝きたかったのか、それとも助けて欲しかったのか。どちらにせよ、ギャル子にとってはとてつもなく長い時間だったに違いないであろう。

最後に、母の胸に抱かれて何を思っただろうか？12年も一緒にいたのに誰一人としてギャル子の気持ちは分かってやれてなかったのではないだろうか？

いつか、私にも寿命がきてギャル子の側に逝く日がやってきたらきっと聞いてみようじゃないか。これからも、ギャル子の事を思う度に増えていく疑問の数々を。その為に、こうしてギャル子を綴った記録が必要なのだ。

泣かない母の涙

母は泣かない人だ。私が母の涙を見たのは母の母（いわゆる私からみれば祖母）が亡くなった時だけだ。

たった一度だけである。

強烈に印象に残っている母の涙は私に衝撃を与えたものだった。なぜなら、母は泣かないと思っていたからで、その時の私はまだ小学五年生だった。

泣かないというよりも【泣く】という感情が欠落しているのだと思っていたのだ。そんな訳があるはずがないではないか！そう、母も泣くのだ。今までだって沢山泣いてきたに違いないが、母は負けず嫌いの性格で人に弱いところを見せようとしない。それによって私が母の涙を見たことが無いのはごくごく当たり前の事で、何一つ不思議なことではないのだ。

その母がギャル子の事になるとめっぽう弱い。今まで散々動物は飼ってきた。リスやいんこ、それにピラニアもいたし蚕だって飼育していた事がある。家にはお祭りで掬った金魚が、もうコイほどの大きさになって何匹も泳いでいる。猫や犬にいたっては数え切れないほど飼ってきた。どうしてギャル子なのだろう？

母は言うだろう。

【みんな可愛かったよ。死んだときはもちろん悲しかったよ。】

と。でも、母にはギャル子は特別だったんじゃないだろうかと、私は思う。なぜかと言われると、少々困ってしまうが、私の動物的野生のカンがそう言っているのだ。なによりあの【泣かない母】が見事に泣いたのだから。

ゴウ君の気持ち

しつこいようだが忘れた頃だと思うのでここでも記述しておくが、うちにはもう一匹犬がいる。前にも述べたが、奴は賢い。ものすごく賢い。彼はギャル子よりも前に我が家にやってきている。

もう、かれこれ14, 5年なるのではなからうか？

ただ、彼にはギャル子の気持ちが分かっていたのかもしれない、という事を私は記したいだけなのであるが、実際のところはいかがなものだろう？

ギャル子が苦しんでいたであろうあの晩、ゴウは起きていたのかもしれない。ギャル子の辛い気持ちを分かってやっていたのはゴウだけではなかったのか、と、ふとそんな事が頭をよぎった。

いや、私の考え過ぎなのだろう。

しかしそんな気がしてならなかった。彼らは本当の兄妹であるかのように通じ合っていたようだったから。もしもそうならゴウは怖かっただろう。一緒に育ってきた妹が息も絶え絶えに時折嘔吐を繰り返しては苦しんでいたのだ。自分もいつかそういう日がやってくるかもしれないのだ。

私は思う。

正直、本当に考えたくはないのだが、その日はそんなに遠くない未来であることは間違いがないと・・・。

[追記・・・悲しいことにゴウ君は2003年の1月に18年という長い人生に幕を閉じました](#)

ギャル男、いよいよお初です。

か
かい考
の
のでは
る
手しにか
こく
夕
談
る
は
す
・
・
く
時
とも
う
た
由
呼
あ
勝
ま
ろ
の
こ
よ
イ
冗
あ
方
脅
・
・
古
の
子
に
言
き
理
お
で
、
め
後
る
が
が
に
て
で
の
と
・
・
は
生
一
ん
と
て
の
に
面
ず
初
の
く
の
薬
君
っ
物
ウ
】
う
れ
私
年
ピ
な
？
っ
っ
席
対
ま
で
母
ま
む
も
ウ
持
見
ゴ
！
伺
や
、
4
ス
で
か
や
一
い
初
。
こ
て
ぎ
し
方
ゴ
く
た
、
！
を
れ
日
校
表
白
の
に
が
た
の
い
こ
っ
嗅
楽
の
、
全
ま
が
！
子
や
吉
学
代
っ
な
根
と
で
と
な
、
が
を
は
臆
て
ば
も
。
！
様
は
月
小
人
真
ら
島
こ
め
男
に
で
下
い
て
い
出
え
れ
い
ん
く
に
0
は
友
は
か
、
う
お
ル
多
の
歩
匂
し
す
に
言
こ
し
ワ
ら
後
1
と
も
中
生
り
言
な
ヤ
滅
た
3
で
想
、
庭
と
、
ら
【
ば
最
年
ん
ら
の
年
あ
と
ん
。
ギ
は
い
・
下
妄
し
に
方
で
る
で
し
も
3
さ
が
頭
4
が
た
こ
た
、
と
て
2
足
と
了
間
の
う
け
声
は
君
0
。
本
な
に
。
故
と
っ
、
っ
う
こ
っ
。
て
々
完
昼
ウ
よ
掛
な
て
ウ
0
る
山
し
の
年
何
こ
だ
と
あ
そ
る
言
い
き
色
は
て
ゴ
る
仕
き
げ
ゴ
2
す
か
う
0
た
期
も
入
が
な
て
療
っ
い
を
大
逃

ギャル子、完結

1 ててわけた遊元慰らやい
て んっやだしでは生きぎ思
き やあの儘まく子一あどに
て 悔が気がちだるなのほこ
っ ?事や我育汗ゃん中いそ
や。かす母しに日ギみのなこ
に年ん残う少子毎。、家えそ
時2せい笑はのでよど、思も
の1ま思くん女りだけりてチ
生たりもよやい盛気だたんモ
年けあででち愛っ元でしなキ
3続は今声赤可真、ま話だヤ
学り事。なのいらなれをんて
中守配すきて強ズんそと死ん
が見心で大め慢タみばこもな
私を配 初我イ えたで?

る てる」め
げ け え。細
上 が こえを
見 め 聞ね目
を 雲 とた片
空 の っつが
ら そ ふな子
がに。 らにル
なこた が人ヤ
しそえ な大ギ
干が思。し、。
を子につをもた
物ルう一見たま
濯ヤよを育ん、
洗ギる息、あら
かいめ今「ほ

ろ名え して
だ題さ てっ
たちで っ張
っい私 な欲
あちる】にと。
でいい?章もだ
章もて?文れう
文にいやなこよ
いう書り拙、た
くど、こ稚もい
にはて、なれて
みにしやうあし
読私りじよ。干
き
が
と
あ

追
る後【とるも
大がしな思の飲
変、たんうだみ
と
あ

し 遊
残 て中え
き っ 娠考
書 立 妊は
に 旅を目
年 に 目人
3 所人 3
0 の 3。
0 子今る
2 ル只あ
は ちはで。
録ギ私覚だ
記のて発の
の国し 娠い
こ天そ 妊な
に のら